

スペイン語における Wh 要素移動

-Focalization、Topicalization と Left Dislocation との比較から-

- その1 -

Movimiento de los elementos [+Qu] en español*

-en comparación con la Focalización, Topicalización, y Dislocación Izquierda-
- la parte primera -

石岡 精三
Seizo ISHIOKA

0. はじめに

本稿では、焦点化 (Focalization) の用例である (1) の相違を説明する Contreras (1991) の論法が、Wh 要素が移動する用例である (2) に拡張可能であることが示される。

- (1)a. *UN ANILLO DE BRILLANTES María quiere (Hernanz & Brucart (H&B) 1987:p.77)¹⁾
b. UN ANILLO DE BRILLANTES quiere María (ibid.)
'it is a diamond ring that María wants'
(2)a. qué trajo el cartero? (Toribio 1993:p.128) b. *qué el cartero trajo? (ibid.)
'what did the mailman bring?'
(3)a. [Agr' UN ANILLO_i...[Agr' María [Agr' [Agr' quiere] [TP tv t_i]]]
b. [Agr' UN ANILLO_i...[Agr' [Agr' quiere] [TP tv t_i]]

主語 NP が定動詞に前置された場合の Focalization と Wh 要素移動の用例は排除される。Contreras (1991) は、スペイン語の Agr が [+lexical] であり、その最大投射が Agr' であると考えられる。よって、SPEC (Agr) が存在しない。(1a) に対応する構造 (3a) において、焦点化の適用を受けた要素 (UN ANILLO...) がその痕跡を先行詞統率しないと想定される (ibid.1991)。Left Dislocation (LD), あるいは Topicalization の適用を受け Agr' に左方付加した位置にある主語 NP (María) が Relativized Minimality Barrier を構成するためである。結果として、構造 (3a) は空範疇原理によって排除される。²⁾ (1a,b) の説明法が妥当するためには、[+focus] 要素が Agr' に左方付加した位置へ移動、あるいは当該位置を通過する必要がある。Contreras (1991) では、この移動・通過の必然性が言及されない。

1. [+finite] CP の構造と Topicalization

1.1. Laka (1990,93) の概要と問題点

(4a-e)で観察されるように、否定要素 (no) と定動詞の間、そして Negative Polarity Item (NPI) 要素 (例えば、nada) と定動詞の間に要素の介在が許されない。

- (4)a. *no yo compro (Stevens 1991:12a)
 b. *no yo compro nada c. *nada yo compro (Stevens 1991:12b)
 d. yo no compro nada (ibid.:12c) e. nada compro yo (ibid.:12d)
 'I don't buy (anything)'

Laka (1990,93) は、CP と IP の間に ΣP を想定することにより、上の相違を説明する。 ΣP の主要部位置に Affirmative Marker (si)、あるいは Negative Marker (no) が生成される。NPI は SPEC(Σ)へ移動し、Negative Marker (no) によって License される (SPEC-HEAD Agreement)。当該 Marker は PF において削除される (Stevens 1991)。SPEC(Σ) 位置へ移動しない NPI は、Marker (no) に C 統御される必要がある。この場合、当該 Marker の削除が発動しない (4d)。また、V が I へ移動することによって生成した定動詞 (compro) は、Tense/C-Condition (TCC) の適用によって、 Σ の位置へ移動する(構造 (5))。³⁾

- (5) [CP [C' C [ΣP nada_i [Σ' Σ [IP yo [I' [I compro] [VP tv t_i]]]]]]]

これにより、(4a-c) の非文性と (4e) の適格性が説明される。問題となるのは、(4d) における主語要素 (yo) の位置である。Zubizarreta (1994) が指摘するように、LD の適用を受けた要素とそれ以外の文要素の間にコンマ (Pause) が出現する。

- (6) a. temprano salía Julia de casa (Zubizarreta 1994:60a)
 early started Julia from home
 b. *temprano Julia salía de casa (ibid.:62a)
 c. temprano, Julia salía de casa (ibid.:63) d. *temprano Julia salía de casa

(4d)において、主語要素と定動詞の間にコンマ (Pause) が介在しない (少なくとも、コンマ (Pause) が生起しない場合の用例が適格と判断される)。つまり、主語 (yo) に対して LD が適用されると考えることはできない。また、NPI が SPEC(Σ) へ移動する引き金となるのは、素性 [+neg] をもつ ΣP の主要部と当該 SPEC(Σ) へ移動する同じ素性 [+neg] をもつ NPI との SPEC-HEAD Agreement である。よって、NPI 以外の要素が SPEC(Σ) へ移動する理由が存在しない(主語要素が SPEC(Σ) に基底生成され、つまり、LD の適用を受けると考えることも不可能である)。⁴⁾ 本稿では、(4d) の主語要素が、(6a-b) の Adjunct (temprano) と同様に、Topicalization の適用を受けると考える(主語要素が、Polp (Polarity Phrase) に左方付加した位置へ移動すると想定する)。

1.2. [+finite] CP の構造

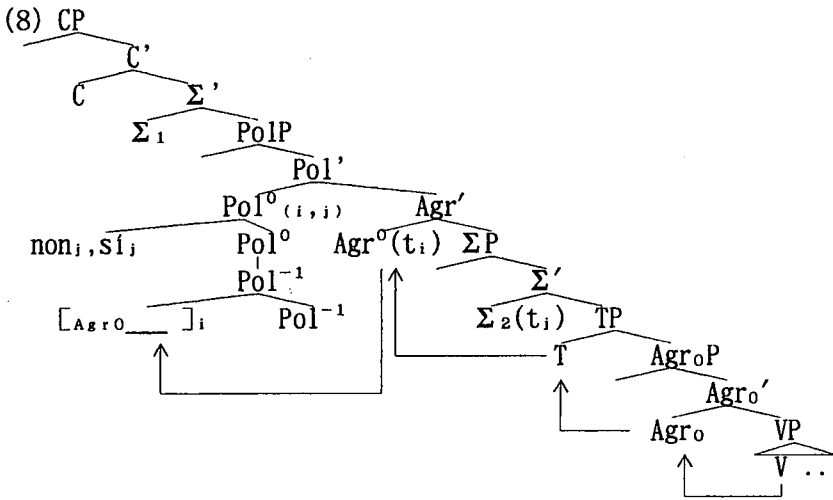
Topicalization の検討に先立ち, Laka (1990,93) の枠組みから以下の用例を考察する。

- (7)a. MARTA si que nunca se acuesta tarde (Campos 1986.p.169,128a)
 MARTA si que never goes to bed late
 b. *Marta si nunca/nunca si se acuesta tarde (ibid.:128b-c)
 Marta yes never/never yes goes to bed late
 c. MARTA si que no vendrá a la fiesta (ibid.:p.168,123)
 MARTA si que not will come to the party
 d. *MARTA no si que vendrá a la fiesta
 MARTA not si que will come to the party
 e. MARTA si que si trabaja mucho (ibid.:p.168,126)
 MARTA si que yes works a lot
 f. sé que MARTA si que nunca se acuesta tarde
 I know that MARTA si que never goes to bed late

C と Agr の間に, Laka が想定する機能範疇 Σ (no, si) に加えて, [+focus] 要素を導入するゼロ範疇 (si que) が存在すると考えられる (この範疇を Σ_1 と呼ぶ)。⁵⁾ NPI (nunca) は, SPEC(Σ)へ S 移動する。よって, Σ_1 は, 少なくとも Σ よりも上位に位置するゼロ範疇と考えられる (7a)。Affirmative Marker Σ (si) は, SPEC(Σ)にある NPI (nunca) と意味論的に衝突 (矛盾) する (7b)。(7c-e) は, Σ_1 と Σ が相異なるゼロ範疇であることを示す。Focus Marker が生起する Σ_1 は, C (que) よりも下位の位置する範疇であると判明する (7f)。

Laka は, Marker (si, no) が Σ 位置に生成されると考える (これらの Marker は, 基底生成された位置から移動することはない)。本稿では, 当該 Marker が基底生成される位置と, S 構造において生起する位置が異なると前提する (cf. Zanuttini 1994)。具体的に, 以下の CP 構造 (8) を想定する。Marker (no, si) は, Σ_2 の位置に生成される。その場合, Pol は, それぞれ素性 [+neg] と [+affirm(ation)] を付与される。V が Agro と T を経由して Agr 位置へ主要部移動することにより, 定動詞が形成される。

Marker (no, si) が生成される Σ_2 を経由しない点に留意されたい。Pol(Pol⁻¹) は, 定動詞形態が生成される Agr⁰ を選択すると考える (よって, 定動詞は, Pol の Selected Slot (SS) 位置へ移動する)。ここで, T から Agr への主要部移動が問題となる。これは, Head Movement Constraint (HMC) に抵触すると思われる。この問題は, Σ_2 に生成される Marker が Pol⁰ に左方付加した位置に移動することにより打開される (Belletti 1990a,b) (この付加移動は, 素性 [+neg], あるいは [+affirm] に関する Checking によって発動する)。それは, 定動詞がその SS へ移動している Pol と Marker の付加移動を受ける Pol が同一連鎖の HEAD を構成するためである。⁶⁾



1.3. Topicalization

Topicalization は、PolP に左方付加した位置への移動によって発動する。換言すれば、Pol に素性 [+top] が付与され、これと同じ素性をもつ最大投射が Checking の適用を受けるため、当該 Pol の Checking Domain に移動する。⁷⁾ 素性 [+neg] をもつ NPI がその Checking Domain (SPEC (Pol)) に移動するため、[+top] 要素の当該 SPEC(Pol) への移動は排除される。[+top] 要素が最大投射であるため、当該要素はゼロ範疇の Checking Domain (この場合、Pol) へ移動することもない。結果として、[+top] 要素は、PolP に左方付加した位置へ移動することになる。⁸⁾ この前提により、本稿の (4) の用例と (6a) が説明される。(4a-d) において、主語要素 (y_0) は PolP に左方付加した位置へ移動している (定動詞は、Pol 内部にある)。よって、(4d) は文法的と判断されるが、他の (4a-c) は、生成不能として非文と予測される。(4e) における主語要素 (y_0) は、それが基底生成された位置にあると考えられる (あるいは、SPEC(Σ_2)へ移動していると考えられる (cf. fn.8)。それでは、Topicalization の用例である (6b) の非文性はどのように説明されるのか。これに関する考察は、次節においてなされる。

2. 本稿の定義体系 (Extended Relativized Minimality (ERM)) と仮説群

(6a, b) の構造として、それぞれ (9a, b) が想定される。如何なる要因によって、(9b) の構造が排除されるのであろうか。

- (9) a. [_{PolP} temprano_i [_{PolP} [_{Pol'} [_{Pol[+top]} salía]_i [_{Agr'} t_{Agr} [_{Σ_{2P}} tv t_i]]]]]]
 b. [_{PolP} temprano_i [_{PolP} Julia_j [_{PolP} [_{Pol'} [_{Pol[+top]} salía]_i [_{Agr'} t_{Agr} [_{Σ_{2P}} tv t_j t_i]]]]]]]]

この問題は、Rizzi (1990) で提唱される Relativized Minimality を以下の (10) のように拡張することによって打開されると考えられる。⁹⁾

(10) Extended Relativized Minimality (ERM) :

X antecedent-governs Y only if there is no Z, Z (X⁰, A-Specifier, A'-Specifier, and Adjunct which is strictly adjacent to and in the same adjunction direction as X) such that

- (a) Z is a typical potential antecedent-governor for Y, and
- (b) Z c-commands Y and does not c-command X.

構造 (9b) において、Topicalization の適用を受けた主語 NP (Julia_j) と、同一素性 [+top] をもつ Adjunct 要素 (temprano_i) は互いに Strict Adjacency の関係にある。また、両者の付加方向も同一である。結果として、主語 NP (Julia_j) は ERM Barrier を構成する。つまり、Adjunct (temprano_i) は、その原初痕跡 (t_i) を先行詞統率しない。結果として、(9b) の派生は、空範疇原理 (ECP) の適正統率によって排除される。一方、構造 (9a) における [+top] 要素の移動は、如何なる Barrier も越えることはない (文法的と予測される)。¹⁰⁾

Contreras (1991) は、Focalization の用例である (1a,b) の説明において、構造 (3a,b) を想定する。(1a) に対応する構造 (3a) は、空範疇原理によって排除される。しかし、前述のように、Contreras (1991) では、[+focus] 要素が Agr' に左方付加した位置に移動、あるいは当該位置を通過する必然性が言及されない。[+focus] 要素が Agr' に左方付加した位置を通過する引き金を明示化し、同時に Wh 要素移動の用例をも説明するため、以下の仮説を設定する。

(11) Hypothesis: Σ_1 , assigned the feature ([+wh] or [+focus]), obligatorily transmits the feature involved successively down to Agr.

素性 ([+wh] あるいは [+focus]) は、 Σ_1 に付与される。 Σ_1 に付与された素性は、Pol を経由して Agr まで受け継がれる。当該素性をもつ最大範疇は、同じ素性を付与・伝達されたゼロ範疇 (Pol, and Agr) の Checking Domain を義務的に通過してその最終着地点である Σ_1 の Checking Domain まで移動する。¹¹⁾ 結果として、(1a,b) と (2a,b) の派生構造として、それぞれ (12a,b) と (13a,b) が想定される。(12a) と (13b) の派生構造は、ECP (ERM) によって排除される。(12a) と (13b) の [+top] 要素 (Maria) と (el catrero) が ERM Barrier を構成するためである。¹²⁾

(12)a. [Σ ' UN ANILLO_i... [Σ ' [Σ_1 [+focus] [$\text{PoIP } t_i$ [PoIP Maria_j] [$\text{PoIP } [\text{Pol}' [\text{pol} [+focus]] \text{ quiere}]$] [$\text{Agr}' \text{ tv } t_i \text{ t}_j$]]]]]]]]]

b. [Σ ' UN ANILLO_i... [Σ ' [Σ_1 [+focus] [$\text{PoIP } t_i$ [$\text{PoIP } [\text{Pol}' [\text{pol} [+focus]] \text{ quiere}]$] [$\text{Agr}' \text{ tv } t_i$]]]]]]]]]

2.2. Topicalization と LD (Wh 要素移動と LD)

本稿では、LD の適用を受けた要素が Σ_1' 、あるいは項でない CP に左方付加した位置に生成されると想定される。[+top] 要素は、PoIP に左方付加した位置へ移動する。よって、LD の適用を受けた要素は [+top] 要素に先行することになる。この予測は、以下の (17) によって例証される ((17b) において、NP (Juan, la carta) の双方に LD が適用される)。また、[+wh] 要素の最終着地点として、 Σ_1' に左方付加した位置が指定される。よって、LD の適用を受けた要素は、[+wh] 要素に先行する (Σ_1' に左方付加した位置に基底生成される LD 要素は、[+wh] 要素移動に対する ERM Barrier を構成する)。これは、以下の (18) によって例証される。

- (17)a. *Juan la carta_i, la_i escribió
 Juan the letter_i it_i wrote
 b. Juan la carta_i, la_i escribió
 c. *la carta_i Juan la_i escribió (Zubizarreta 1994:75b)
 d. la carta_i, Juan la_i escribió (ibid.:75c)
- (18)a. las acelgas_i, quién las_i detesta? (H&B 1987:p.85,37b)
 las acelgas_i, who them_i detests
 b. *quién las acelgas_i las_i detesta? (ibid.:38b)

[+wh] 要素同様、[+focus] 要素は Agr と Pol の Checking Domain を通過して、最終的に Σ_1' に左方付加した位置へ移動する。結果として、[+wh] 要素と LD が混在する (18a,b) の相違は、[+focus] 要素と LD の用例においても観察されると予測される。この予測は、以下の用例 (19) によって例証される。

- (19) (Campos & Zampini 1990:30a,b)
- a. el libro_i a MARÍA_j se_j lo_i dio Juan (y no a Rosa)
 the book_i to MARÍA_j to her_j it_i gave Juan (and not to Rosa)
- b. *el LIBRO_i a María_j se_j lo_i dio Juan (y no las revistas)
 the BOOK_i to María_j to her_j it_i gave Juan (and not the journal)

(Continuará)

註

- *) 本稿は、日本ロマンス語学会第33回大会（青山学院大学，1995年5月20日）における研究発表に修正・拡張を加えた論考の第一部である（第二部において、本論の残部と第34回大会で発表予定の論考が提示される）。
- 1) Focalization の適用を受けた要素 [+focus] を付与された要素）は大文字で示される。Topicalization の適用を受けた要素は二重下線の強調体で表示される。[+focus] 要素の最終着点として、 Σ_1 の最大投射に左方付加した位置が指定される。LD の適用を受けた要素は、項でない CP、あるいは Σ_1 の最大投射に左方付加した位置に基底生成される（波線強調体で示される）。LD 要素と他の文要素の間には、通常コンマ（Pause）が生起する）。一方、Topicalization の適用を受けた要素 [+top] 要素）は、それが基底生成された位置から PolP（Polarity Phrase）に左方付加した位置へ移動する（[+top] 要素と他の文要素の間には、通常コンマ（Pause）がない）。
 - 2) Wh 要素移動の用例（2a,b）の相違は、異なる原理（Closed Domain Condition（CDC））によって説明される（CDC の詳細に関しては、Contreras（1989）を参照されたい）。本稿では、（1a,b）と（2a,b）の相違が同一の原理によって説明される（Extended Relativized Minimality（ERM））。
 - 3) Tense/C-command Condition（TCC）: At S-Structure, Tense must c-command all inflectional heads that operate on the event（Laka 1993:19）
 - 4) Bosque（1994）と同様に、定動詞の右方に生起する NPI が SPEC（ Σ ）位置へ LF 移動することにより License されると考えてみよう。この場合も、主語要素が SPEC（ Σ ）位置に移動、あるいは基底生成されると想定することはできない。Bosque（1994:fn.2）は、（4d）の主語要素が CP に（左方）付加した位置に生成されると考える。しかし、この前提には問題がある。主語要素が LD の適用を受けると想定すると、当該要素と他の文要素の間にコンマ（Pause）が生起すると考えられる。前述のように、主語要素（yo）の直後にコンマ（Pause）が生起しない派生が適格と判断される。
 - 5) 本稿では仮に、当該 Σ_1 を Agr 同様、[+lexical] と想定する（ Σ_1 'が Σ_1 の最大投射と考える）。
 - 6) この効果を得るためには、構造（8）において、Agr⁰ の指標と Pol に左方付加した位置へ移動する Marker の指標が最上位の Pol 位置へ上昇浸透すると考える必要がある。さらに、主要部移動に課される先行詞統率における指標が Non-Distinctness によって規定されると想定する必要がある。これらの前提により、最上位にある Pol は、痕跡（ t_i, t_j ）を先行詞統率可能となる（Belletti 1990a,b）。Agro 位置に基底生成されると考えられる Clitic が生起する用例に関しては、後述の予定。
 - 7) X⁰ 範疇の Checking Domain として、X⁰ に（左方）付加した位置、XP に（左方）付加した位置と SPEC（X）が指定される（Toribio 1993 and Chomsky 1992）。
 - 8) PolP に右方付加した位置へ移動することによって発動する Topicalization も存在すると考えられる。スペイン語において、定動詞を含む Agr、あるいは Pol は VP に付加した位置に生成される主語 NP に Nom(inative) を付与可能である。後述するように、直接目的語 NP は、SPEC（Agro）において対格を付与されると想定される。この場合、以下の用例（1a-b）における主語 NP（Juan）の位置が問題となる。仮に、主語 NP（Juan）が SPEC（ Σ_2 ）位置へ移動している考える（更なる調査が必要）。
- (i)a. escribió Juan la carta（Zubizarreta 1994:33a）
wrote Juan the letter 'Juan wrote the letter'
b. me trajo Juan el paquete（Zubizarreta 1994:33b）
to me brought Juan the packet 'Juan brought me the packet'
- 9) 以下の（i）と（ii）は、本稿で採用される適正統率と先行詞統率の定義である（（iii）は主要部統率の定義）。
- (i) X is properly governed iff (a) and (b):
 - (a) X is canonically head-governed (Licensing)
 - (b) X is antecedent-governed (Identification).
 - (ii) X antecedent-governs Y iff
 - (a) X and Y are coindexed
 - (b) X m-commands Y
 - (c) no barrier intervenes

- (d) Extended Relativized Minimality (ERM) is respected.
- (iii) X head-governs Y iff
- (A) a. X is a head
b. X m-commands Y
- (B) X = { [$\pm V \pm N$], C, Σ_1 , Pol, Agr, Σ_2 , and T }
- (C) a. no barrier intervenes
b. Relativized Minimality is respected.
- 10) Pol[+top] の最大投射に右方付加した位置への移動による発動する Topicalization が存在するならば、以下の (i) も文法的と予測される (調査の要あり)。
- (i) temprano salió de casa Julia
- 11) この前提の下では、[+wh] 要素が Σ_1 ' に左方付加した位置においてその移動を停止することになる (Root Context において)。embd.CP 内部では、matrix V がその sister 要素である CP の主要部に素性 [+wh] を付与する (当該素性は、 Σ_1 と Pol を経由して Agr まで受け継がれる)。よって、embd.CP 内部では、[+wh] 要素は embd.SPEC (C) 位置まで移動する。
- 12) (12a) と (13a) における Pol は、同時に素性 [+top] を付与される (一般的に、当該素性が直接下位の範疇 (Agr) に受け継がれることはない)。よって、[+top] 要素が Agr の Checking Domain を通過しない (通過する必要がない) ([+wh] 要素は、Agr の Checking Domain を義務的に通過する)。結果として、本稿では、Contreras (1991) の構造 (3a,b) を想定できない。
- 13) 以下の (i) - (ii) は問題を惹起するようと思われる。
- (i) ha dicho Juan LA VERDAD (H&B 1987:p.105)
has said Juan THE TRUTH
- (ii) a. a quién_i visitó quién_j (Contreras 1984:1a)
whom visited who
b. qué_i vio quién_j? (Jaeggli 1988:fn.1)
what saw who
- (i) は、[+wh] 素性が付与される Σ_1 の最大投射に左方付加した位置に空の [+wh] OP(erator) が生成されると想定することにより説明されるであろう (当該 OP が ERM Barrier となる)。(ii) は、複数の [+wh] が共起する場合の LF 移動が $\Sigma_1 P$ に左方付加した位置にある NP_i (a quién_i, qué_i) への左方付加によって発動すると考えることにより打開されるであろう (May 1985)。この場合、(ii b) に対応する構造 (iii) の NP_i に付加した位置が Σ_1 の Checking Domain に属すと想定する必要がある (詳細は、稿を改める)。
- (iii) [Σ' [_{NP_i} [_{NP_j} quién_j]] [_{NP_i} qué_i]] [Σ' Σ_1 [+wh] [PolP...]]

参考文献

- Arnaiz, A. (1992). "On Word Order in Wh-Questions in Spanish." MIT Working Papers in Linguistics 16, 1-10.
- Belletti, A. (1990a) "On the Morphosyntactic Nature of the Sequence "Aux-Past Participle" in Italian." Mascaró, J. and M. Nespó (eds.) Grammar in Progress, Foris, Dordrecht.
- Belletti, A. (1990b). Generalized Verb Movement. Rosenberg & Selier, Torino.
- Bosque, I. (1994). "La Negación y el Principio de las Categorías Vacías." Demonte, V. (ed.) Gramática del Español, Centro de Estudios Lingüísticos y Literarios, El Colegio de México.
- Brucart, J. M. (1993). "Sobre la estructura de SCOMP en español." Viana, A. (ed.) Sintaxi, Teoria i Perspectives, Pagès Editors, Lleida.
- Campos, H. R. (1986). Inflectional Elements in Romance. Ph. D. dissertation, University of California, Los Angeles.
- Campos, H. R. and M. Zampini (1990). "Focalization Strategies in Spanish." Probus 2.1, 47-64.

- Chomsky, N. (1992). "A Minimalist Program for Linguistic Theory." MIT Occasional Papers in Linguistics 1.
- Contreras, H. (1989). "Closed Domains." Probus 1-2, 163-180.
- Contreras, H. (1991). "On the Positions of Subjects." Rothstein, S.(ed.) Syntax and Semantics 25: Perspectives on Phrase Structure, Heads and Licensing. Academic Press, London.
- Contreras, H. (1992). "On Resumptive Pronouns." Campos, H. and F. Martínez-Gil (eds.) Current Studies in Spanish Linguistics. Georgetown University Press, Washington, D.C.
- Fontana, Josep M. (1993). Phrase Structure and the Syntax of Clitics in the History of Spanish. Ph. D. dissertation, University of Pennsylvania.
- Fukui, N. and M. Speas (1986). "Specifiers and Projection." MIT Working Papers in Linguistics 8, 128-172.
- Goodall, G. (1992). "On the Status of SPEC of IP." WCCFL 10, 175-182.
- Goodall, G. (1993). "Spec of IP and Spec of CP in Spanish Wh-Questions." J. Ashby, W., M. Mithun, G. Perissinotto and E. Raposo (eds.) Linguistic Perspectives on the Romance Languages. John Benjamins, Amsterdam/Philadelphia.
- Hernanz, Ma. Lluisa and José Ma. Brucart (1987). La Sintaxis. Editorial Critica, Barcelona.
- Koopman, H. and D. Sportiche (1991). "The Position of Subjects." Lingua 85, 211-258.
- May, R. (1985). Logical Form Its Structure and Derivation. MIT Press, Cambridge (Mass.) .
- Laka, I. (1990). Negation in Syntax: on the Nature of Functional Categories and Projections. Ph. D. dissertation, MIT.
- Laka, I. (1993). "Negative Fronting in Romance: Movement to Σ ." J. Ashby, W., M. Mithun, G. Perissinotto and E. Raposo (eds.) Linguistic Perspectives on the Romance Languages. John Benjamins, Amsterdam/Philadelphia.
- Mendikoetxea, A. (1993). "Los Clíticos como Categorías Subléxicas de Concordancia." Fernández Soriano, O. (ed.) Los pronombres átonos. Taurus, Madrid.
- Rizzi, L. (1990). Relativized Minimality. MIT Press, Cambridge (Mass.) .
- Sánchez Pérez, A. (1985). Gran Diccionario de la Lengua Española. SGEL, Madrid.
- Stevens, A. (1990). "The Structure of Negative Quantified Sentences in Spanish." CLS 27, 309-318.
- Suñer, M. (1994). "V-Movement and the Licensing of Argumental WH-phrases in Spanish." Natural Language and Linguistic Theory 12. 335-372.
- Toribio, A. J. (1993). Parametric Variation in the Licensing of Nominals. Ph. D. dissertation, Cornell University.
- Torrego, E. (1984). "On Inversion in Spanish and Some of Its Effects." Linguistic Inquiry 15, 103-129.
- Zagona, K. (1988). Verb Phrase Syntax: A Parametric Study of English and Spanish. Kluwer, Dordrecht.
- Zanuttini, R.(1991). Syntactic Properties of Sentential Negation. A Comparative Study of Romance Languages. Ph. D. dissertation, University of Pennsylvania.
- Zanuttini, R.(1994). "Re-Examining Negative Clauses." Cinque, G., J. Koster, J-Y. Pollock, L. Rizzi, and R. Zanuttini (eds.) Paths Towards Universal Grammar, Georgetown University Press, Washington, D.C.
- Zubizarreta, M. L. (1994). "El Orden de Palabras en Español y el Caso Nominativo." Demonte, V. (ed.) Gramática del Español, Centro de Estudios Lingüísticos y Literarios, El Colegio de México.